

3. 子熊と蜂蜜

長い冬ごもりの後、母熊は起きてストレッチをしました。そして小熊がまだ熟睡していることに気付きました。

「坊や、起きなさい」と母熊は言いました。「外に行って世界を知る時が来たわ。

あなたには学ばなきゃならない事がたくさんあるのよ」

そして、そうです。この時が、小熊が生まれ落ちた旅の始まりだったのです。

小熊がよろけながらその冬の家から出た時、初めて彼は木々や湖、山々を遠くに見たのです。

「わあ、お母さん！」彼は言いました。「この世界って広いね！」

「そうよ、坊や、世界はすごく広いのよ」

これは母熊がこの世界に送り出した2番目の子供でした。

最初の子供は今では5歳になり、この冬の家からかなり遠くの北の方を彷徨っています。

母熊が教えた全てのことは、この最初の小熊に長生きできる強さを与えました。

今、母熊は坊やに同じように人生について教えます。

人生2年目で、坊やは森の小動物についてもっともっと探求し始めました。

そしてある日、地面を嗅いでいた時、何かいい匂いに気付きました。

それは蜂蜜だったのです！

坊やは地面を舐め続けて「この甘いものはどこから来たのだろうか？」と思いました。

その甘いものを全部舐めきった時、坊やは立ち上がり見回してみましたが、それが

どこから来ているのかわかりませんでした。

その時、急にその甘いものが一滴彼の鼻に落ちてきました。

坊やは仰天しました。そしてその甘いものは、高い木の中にある丸い感じの袋から落ちて来ていることに気付きました。

それは蜂の巣だったのです。母熊から教わっていなかったので、坊やはその巣が危険なことを知りませんでした。

坊やはその甘いものがあの袋から来ることはわかっていました。木を見渡してその甘いものを得るために、何をしなくてはならないかを決めることはチャレンジでしたが、難しくはありませんでした。

「これは本当に簡単だ」と彼は思いました。

坊やはすでに木に登りはじめました。蜂の巣が付いているところにどうやって上がるか分かっていました。そこまで来ると羽音が聞こえ始めました。それからその灰色の巣袋に一匹の虫が入っていくのを見ました。それから次々と虫達は入っていきました。

「これは彼らの家に違いない」と坊やは思いました。坊やは四つ足を駆使してその袋を掴もうとしました。

その時、たくさんの虫達が急に巣から出てきて彼を刺し始めました。坊やは急いで木から降りましたが、その虫達は追いつけてきました。

坊やの顔は虫で覆われてしまい、刺し傷で目眩がしていました。

坊やは小川まで走って走って、そこへ飛び込みました。虫達は川の中まで追いかけて来ることはできませんでした。坊やが川から顔を出した時には、虫達は

いなくなっていました。

傷ついた坊やは、やっとお母さんのいる家まで辿り着きました。

「坊や、何が起こったの!？」お母さんは叫びました。

坊やは虫達のことを話しました。

「蜂だわ!」「蜂よ!あなたは彼らの家を煩わせたに違いないわ」と言いました。

坊やは「うん」と言いました。

そしてお母さんは蜂が作る蜂蜜のことについて話しました。

「彼らはとても危ないの」「彼らの邪魔をするとすごく危険なのよ」と言いました。

「でもお母さん!僕は蜂蜜を味わうのが大好きなんだ。蜂の国と

話してくれる?あの蜂蜜が大好きなんだよ」

「わかったわ。お母さんから話してみるわ」と言いました。

そして、蜂国と熊国の間で会合が開かれました。母熊は自分の立場を説明しました。

そして「もし蜂国が熊国に蜂蜜を分けてくれたら、熊は二度と蜂の巣に危害を

加えないことに合意します」と言いました。

蜂達は熊に同意しました。

今日においても、蜂はいつも熊のために仮の蜂の巣を作っています。そして本当の

蜂の巣は熊に邪魔されることがありません。

このようにして熊は蜂蜜が大好きになり、蜂達と友達になったのです。

-終わり-